１　アブラムシ類

A 発生生態

１　ニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシの３種が寄生する。
２　ニセダイコンアブラムシは、夏から秋にかけて多く発生する。黄緑色で薄い白粉を背面に帯びている。ダイコン、ハクサイ、カブなどに寄生が多く、キャベツでは比較的少ない。
３　モモアカアブラムシは、有翅虫の飛来は４月頃から認められる。春季のピークは４月下旬～５月中旬で６月上旬以降少なくなり、９月下旬以降再び増加する。寄生はアブラナ科、ナス科野菜など２００種に及ぶ。
４　ダイコンアブラムシは、春から初夏にかけて多くなる。黄緑色で白粉で覆われ白く見える。キャベツでの発生が多く、ダイコン、ハクサイでは少ない。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　プラスチックシルバーフィルム等などのマルチにより有翅虫の飛来を防ぐ。
２　障壁作物によって有翅虫の飛来を防ぐ。

C 薬剤防除のポイント

ウイルス病予防のため、発生初期からの防除に努める。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

２　コナガ

A 発生生態

１　年間の発生回数が多く、温度が８℃以上あれば発育を続ける。一般に春と秋の発生が目立ち、被害も著しい。大発生すると、ダイコン、ハクサイ、キャベツの葉の葉心、葉脈のみを残して加害し、幼苗の場合はそのまま枯死することもある。

２　成虫は葉の裏面に１粒ずつ卵を点々と産みつける。ふ化幼虫は葉肉内にもぐり、２齢期ごろに葉表に出てくる。

コナガの若齢幼虫

コナガの幼虫

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺のアブラナ科雑草を除去する。

C 薬剤防除のポイント

１　同一系統の薬剤を連用すると、薬剤感受性が低下するので、ＩＲＡＣコードの異なった薬剤を組み合わせて、ローテーション散布を実施する。

２　ジアミド系薬剤（ＩＲＡＣコード：２８）の感受性が低下しているので、年１回の使用とする。

３　幼虫、蛹などの各ステージが混在すると１回のみの防除では効果が劣るため、７～１４日間隔で数回実施する。また、作型が混在する地域では特に発生が多く、薬剤抵抗性がつきやすくなる。

４　病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。

©2010 熊本県くまモン

３　ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

A 発生生態

1　幼虫態で越冬し、成虫は４～５月に現れ、年に数世代繰り返す。
2　被害は夏から初秋にかけて播種するダイコン、ハクサイに多く、特に高温乾燥の年に被害が著しい。

B 化学薬剤以外の防除方法

1　８月まきのダイコンでは、できるだけ早まきを避ける。
2　障壁作物の間作で成虫の飛来を防ぐ。

C 薬剤防除のポイント

生育初期に加害を受けると被害が著しいので、防除は本葉の出始め頃に１回とその後１週間おき１～２回実施する。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

４　ネキリムシ類（カブラヤガ、タマナヤガ）

A 発生生態

１　幼虫態で越冬し、成虫は４～５月に現れ、年に数世代繰り返す。
２　被害は夏から初秋にかけては種するダイコン、ハクサイに多く、特に高温乾燥の年に被害が著しい。
３　生育初期に加害を受けると被害が甚大となりやすい。

B 化学薬剤以外の防除方法

８月まきのダイコンでは、できるだけ早まきを避ける。

C 薬剤防除のポイント

薬剤防除は本葉の出始め頃に１回とその後１週間おきに１～２回実施する。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

５　ヨトウムシ（ヨトウガ）

A 発生生態

１　ハクサイ、キャベツ、レタス、バレイショなど多くの野菜を加害する。

２　第１回成虫は４月上旬～５月中旬、第２回成虫は９月上旬～１０月上旬に現れ、産卵する。加害は秋季に著しい。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場の周辺に遮断溝を作るか、ほ場周辺をビニールや塩ビ板で囲うことで幼虫の侵入を防ぐ。

C 薬剤防除のポイント

防除は、若齢幼虫が集団となっている食害初期をねらって薬剤散布するのが最も効果的である。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

（アブラナ科）

６　ハスモンヨトウ

A 発生生態

１　ハクサイ、キャベツ、レタス、エンドウ、バレイショ、サトイモなど多くの野菜を加害する。
２　若齢幼虫は集団で加害し、葉は白くかすり状になる。
３　被害は８月～１０月にかけて大きくなり、とくに夏季が高温乾燥に経過する年には、秋に大発生することがある。

ハスモンヨトウの幼虫

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場の周辺に遮断溝を作るか、ほ場周辺をビニルや塩ビ板で囲うことで幼虫の侵入を防ぐ。

C 薬剤防除のポイント

１　ほ場を見回り、幼虫が分散する前の若齢幼虫期に薬剤散布を行う。
２　指標作物としてサトイモなどの被害状況を観察し、早期防除に努める。
３　病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。

©2010 熊本県くまモン

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

7　アオムシ（モンシロチョウ）

A 発生生態

1　年６～７回発生し、１年を通して幼虫の被害が認められる。
2　ふ化幼虫の食害は少ないが、齢期が進んだ幼虫は葉脈を残して葉を食べつくすことがある。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺のアブラナ科雑草を除去する。

C 薬剤防除のポイント

薬剤防除は、若齢期を対象に実施する。

モンシロチョウの幼虫

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

8　キスジノミハムシ

A 発生生態

1　年３～５回の発生で、成虫が草の根元や土壌の間隙で越冬する。
2　成虫は葉を食害し、幼虫は土壌中で、ダイコン、カブ、ハクサイの根部を食害する。このため、発芽後の生育が悪く、根の加害は商品価値を落とす。
3　アブラナ科野菜の連作や暖冬及び６～７月に雨が少ないと多発する傾向にある。

B 化学薬剤以外の防除方法

1　アブラナ科野菜の連作を避ける。
2　雑草の根元、収穫残さの葉の間などで越冬するのでほ場周辺を清潔にしておく。
3　０．８mm目以下の被覆資材で覆うと被害を回避できる。

C 薬剤防除のポイント

薬剤防除は、は種２０～３０日までが重要であり、幼虫加害を防ぐための粒剤の施用と飛来成虫の産卵防止のための茎葉散布を併用すれば防除効果が高い。

キスジノミハムシの成虫

葉の食害

根の食害

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

９　オオタバコガ

A 発生生態

１　本種は、６月から増え始め、年４～５回発生する。発生量は９～１０月に最も多くなる。
２　成虫は点々と産卵するため、株当たりの幼虫数は１～数頭と少ない。しかし、幼虫は結球部に潜り、食害するので被害が大きい。
３　幼虫の体表面には粗い毛が肉眼で確認でき、ヨトウガ、ハスモンヨトウの幼虫と区別できる。

B 化学薬剤以外の防除方法

被害株は次世代の発生源となるので、ほ場外に持ち出し、処分する。

C 薬剤防除のポイント

１　株あたりの幼虫数が少ないため、初期の被害を見つけるのは困難である。フェロモントラップなどを用いて成虫の発生時期、量の把握に努める。
２　病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html）に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。
３　幼虫は、結球部に潜り食害するため、薬剤の効力があがりにくい。結球が早い品種では、防除時期に注意を要する。

©2010 熊本県くまモン

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

１０　ナメクジ類

A 発生生態

1　雑食性で葉を食害する。また、結球株の株元近くに潜り込むので商品価値を損ねる。葉が不整形に食害された株では光沢のある粘液の這い跡が見られる。
2　夜行性であるが、降雨時や雨上がりの時には昼間でも食害するのが見られる。明け方や夕方にも活動するので、このような時に発生の確認を行う。
3　湿気の多いほ場で発生が多く、常発地では被害が大きい。また、畦畔近くの株や周辺に雑草地があるほ場では発生が多くなる。
4　作物や有機物の残さは、生息場所や産卵場所となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

1　ほ場の排水を良くする。
2　ほ場周辺の雑草や作物残さを除去し、生息や産卵をなくす。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

１１　カタツムリ類（ウスカワマイマイ）

A 発生生態

1　雨の多い時期に発生加害し、各種野菜の葉を食害する。また、越冬した成貝や幼貝は４～５月頃から活動を始め、日中は根際や地中浅くかくれ、夜間に現れて食害する。
2　酸性土壌（ｐＨ５以下）や湿潤な場所に発生しやすい。

B 化学薬剤以外の防除方法

1　ほ場の排水をよくし、作物残さ、雑草の除去及び土壌酸度の矯正を行う。
2　小面積では捕殺する。

C 薬剤防除のポイント

常発地では、ほ場環境の改善が主体であり、多発した場合には薬剤を使用する。

農薬検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！